わだい浪切サロン（2020 年 11 月 18 日）

2020 年アメリカ大統領選挙とその歴史的背景

藤木剛康

【1】2020 年アメリカ大統領選挙の概要

- 選挙の流れ。予備選（2～6 月）→党大会（8 月）→本選（9～11 月）→（12.8：州による選挙人選定期限→12.14：選挙人による投票）→新大統領就任（2021 年 1 月 20 日）。
- 州ごとに人口比で定められた「大統領選挙人」を勝者が総取り

［図表-1］2020 年アメリカ大統領選挙の概要

  - 全国レベルでの支持率はあまりあてにならない。
  - 共和党支持の「赤い州（おおむね田舎）」と、民主党支持の「青い州（沿岸の都市部）」。勢力の拮抗する激戦州（スイング・ステート）の動向が勝敗に直結する。今回は、アイオワ、ウィスコンシン、ミシガン、オハイオ、ペンシルバニア、ニュー・ハンプシャー、アリゾナ、テキサス、フロリダ。
- 投票日後に起こっていること
  - 州ごとのルールに基づき郵便投票の開票。「赤い蜃気楼」
  - トランプ陣営の訴訟・遅延戦略→選挙中から「郵便投票は不正」。票の数え直しや訴訟に持ち込む。大統領自らが選挙の正当性を傷つける行為→大統領選に限れば民主党の明確な勝利。
- アメリカ史上最大・最低の大統領選。
  - 投票率は 66.4%。バイデンの得票数 7500 万票は歴代 1 位、7100 万票のトランプも 2 位。
  - コロナ禍（トランプの罹患）、人種差別反対運動の全国的高揚、ルース・ベイダー・ギンスバーグ最高裁判事の死…大事件の連続にもかかわらず、保守・リベラルの政治的分断という大勢に影響なし→全ての事件が党派対立にからめとられている。2 つの世界観・政治信条・生活様式の深刻な対立。

［図表-2］保守とリベラル～コロナ対策か、経済か

［図表-3］保守とリベラル～どのような人たちか

［図表-4］保守とリベラル～どのように住んでいるのか

    - リベラル。人種的に多様でグローバルなネットワークの中核にある都市のアメリカ。高度なサービス業・知識産業。
    - 保守。白人を中心とする地方コミュニティのアメリカ。製造業、周辺的なサービス業（エッセンシャルワーカー）。
  - なぜ、これほどの政治的・思想的対立が生じたのか？→保守・リベラルの内容や両者の対立軸は、アメリカ社会の長期的な変化に対応して歴史的に大きく変化してきた。実は、トランプが掘り当てたアメリカ社会の変化は、リンカン以来のアメリカの社会的合意すら掘り崩すものであるかもしれない。

【2】アメリカにおける「保守とリベラル」の歴史的展開

【2-1】アメリカにおける保守とリベラル

- 西欧基準では、「近代（＝現代）」に対する態度の違い。自由や平等などの合理主義的改革（＝革命）を肯定するのがリベラル（左翼）、伝統や身分制、古い共同体への回帰や保全、漸進的改革を肯定するのが保守（右翼）。

・ アメリカの場合→ネイティブ・アメリカンを追い出し、最初から自由で平等な近代社会として建国。では、アメリカの「保守」とは何を保守するのか？
  - 自由と平等、自立した個人という理念を守るため、小さな政府を志向するのが保守、理念を実現するために大きな政府を志向するのがリベラル。
  - ただし、黒人、とりわけ南部の黒人奴隷は含まれなかった。南部＝奴隷農園主を頂点に、黒人奴隷を最下層とする「身分制社会」。貴族文化→南北戦争で北部共和党＝自由社会が身分制社会に勝利。
  - ゲティスバーグ演説。「人民の人民による人民のための政治」→自由と平等の原則に拠って立つ政府。
  - ただし、南部では戦争後に黒人取締法（ジム・クロウ法）を制定し黒人を抑圧。

［図表-5］政治的対立軸の変化
  - 対立軸は 2 つ→①経済的論点（自由放任を志向する「小さな政府」か、再分配を志向する「大きな政府」か）、②文化的・社会的論点（人種的少数派擁護をしない「小さな政府」か、少数派支援を志向する「大きな政府」か）。1960 年代以降、主要な対立軸が経済的論点から社会的・文化的論点に移行

【2-2】大恐慌とルーズベルトの時代→「アメリカ的リベラル」の形成。
・ 民主党・ルーズベルト大統領が大恐慌対策として大規模公共事業や社会保障の拡充を推進し、都市の移民や黒人、南部の白人からなるニューディール連合を構築。1936 年大統領選で地滑り的勝利→政府の積極的な介入を是とするリベラリズムの確立。
・ 仕切られた社会。全国規模の労働組合や友愛団体など各種の自発的結社を通じて、広範な国民が公的活動に参加。ただし、南部の黒人は暗黙裡に排除されていた。
・ 1964 年公民権法。人種差別を法的に禁止→反発する南部の白人は共和党に。民主党の若い活動家も既存の労働組合や政治団体の官僚主義を嫌い、黒人や女性の解放運動に合流。アファーマティブ・アクション（差別是正措置）の推進→ニューディール連合の解体。

【2-3】経済停滞とレーガンの時代→保守連合の形成。
・ レーガン共和党政権の成立（1981 年）。ニューディール連合に反発する様々な勢力が、人種差別を容認する勢力を排除して一つのまとまった保守連合を形成。1970 年代の経済停滞を背景に政権を奪取→①反共タカ派（軍事・外交）、②小さな政府を志向する中小企業・財界、③伝統的な文化や生活を擁護する宗教勢力。
・ 小さな政府＝経済優先、個人優先の新自由主義の時代へ→民主党でも、経済格差の是正よりも人種的・文化的少数派の権利の擁護・促進を主張する勢力が拡大。
・ 流動化した社会。全国規模の団体や組合、結社の衰退→少数の専門家や活動家が寄付を募って政治や世論に働きかける権利擁護団体（アドボカシー・グループ）の台頭。これらの権利擁護団体の多くは環境や人権、減税など特定の論点についてのみ活動する。

【2-4】1990 年代以降、保守とリベラルが拮抗し、党派対立が激化→政治の停滞。
・ 対立軸の変化。経済問題＝経済的再分配の是非→文化・社会問題＝人種的少数派への政府支持の是非へ。
  - 共和党。民主党支持の白人労働者の支持を得るため、文化・社会問題で保守的な価値観を強調。
  - 民主党。文化・社会問題でリベラルな価値観を強調し、都市のリベラルな人々、特に若者の支持を獲得。
  - 双方は都市のリベラルな専門職層と、地方の保守的な白人労働者を交換。

- 分断化した社会。多数の権利擁護団体が、それぞれの論点やイデオロギーに従って保守もしくはリベラルの陣営に振り分けられ、2 つの閉鎖的なネットワークを形成。

【2-5】近年における保守・リベラルの思想的行き詰まり

・ ブッシュ Jr.政権末期、保守派内部の政策対立により保守連合の解体。
  - 経済問題：①反共タカ派と③宗教勢力は「大きな政府」を志向。外交問題：①反共タカ派と②財政保守は国際志向だが③宗教勢力は国内志向。
  - 貧富の格差の拡大、2008 年金融危機による経済的困窮、アフガン、イラク戦争の失敗とともに、③を通じて共和党を支持した白人労働者層の不満が高まる。
  - しかし、白人労働者層はリベラルの掲げるアイデンティティ政治にも反発。
・ リベラル内部の政策対立。文化・社会問題で少数派の権利の促進を主張する勢力、経済問題で格差是正を求める勢力（左派・リベラルの活動家）と、中道派（職業政治家）の対立。とりわけアイデンティティ政治＝多文化主義の問題。
  - 多文化主義。アメリカ国民＝独自の伝統と文化を持つ様々な集団の集まりと考え、それらの違いを尊重すべきだとする考え方→「自由や平等、自立した個人」というアメリカの伝統的な価値観までも「白人中心の価値観」だとして批判→キャンセル文化＝有名人の過去の「差別」発言を掘り出し SNS で糾弾する運動。
  - NY タイムズの「1619 プロジェクト」→1619 年＝黒人奴隷が植民地アメリカにつれてこられた年。アメリカ史＝黒人迫害史であり、アメリカ独立も奴隷制維持のため→BLM 運動でのリンカン、ワシントン銅像引き倒し。
  - 白人労働者の反発。多文化主義は多数派である白人のアイデンティティを尊重しない→「自分たちは、毎日の苦しい生活に耐え、アメリカン・ドリームを実現するための「列」に並んで待っている。しかし、前の方では黒人、女性、移民といった人々が列に割り込んでおり、その分、自分たちが後ろに追いやられているように感じる（ホックシールド）」。

【3】歴史的背景から見た 2020 年大統領選挙

・ 政治現象としてのトランプ＝トランプ現象とは？
  - 「長年裏切られてきた」白人労働者層の恨みつらみを見出し、代弁→反グローバル化、反アイデンティティ政治、反ワシントンのエリート（職業政治家）。大統領自らが deep state や大統領選挙を批判。
  - ナショナルな保守主義。アメリカ固有の歴史や文化、地域コミュニティの擁護を国民統合の理念とする保守主義思想の提起。リンカン以来、国民統合の理念は自由や平等などの普遍的理念に基づくものだった。
  - さらにその深部には、これまで保守運動から排除されてきた白人至上主義などの人種差別思想も入り込む。
  - アメリカ固有の歴史や文化を強調するのはよいとしても、人種差別の歴史や非白人の存在をどのように位置づけるのか。
・ アイデンティティ政治の問題点
  - 近年における人種的・文化的多様化の進展→多様化した個々の集団がそれぞれに固有の伝統や文化を主張しているだけでは、その全体を束ねる「アメリカの理念」は限りなく空虚になる。
  - 自由や平等といったアメリカの理念そのものに対する攻撃。「西欧中心主義」「黒人差別を隠蔽」→バラバラなアイデンティティ集団に分解していくアメリカ。
  - カマラ・ハリスの演説→「アメリカは平等なチャンスの国。いかなるマイノリティに対してもアメリカン・ドリームは開か

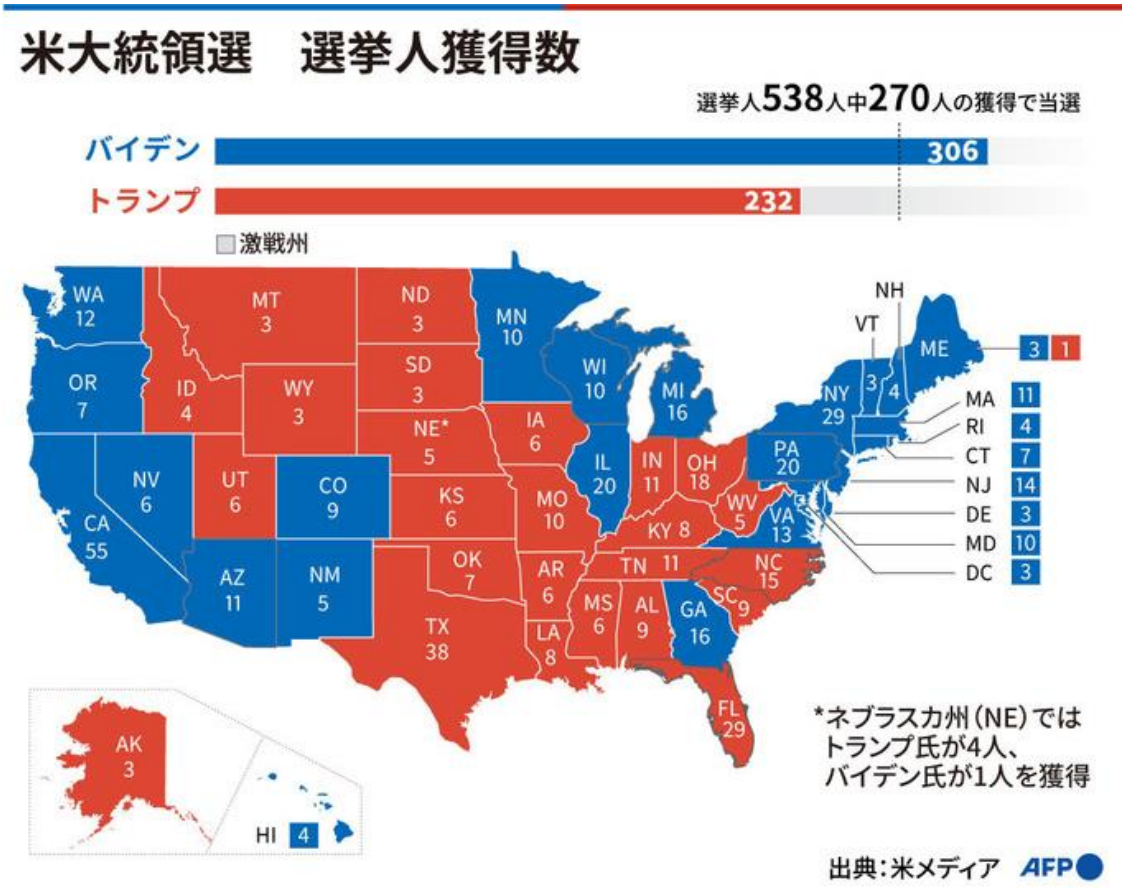
れている」。素晴らしい演説だが、果たしてトランプ支持層に届くか？

- 経済的論点ではコロナ禍の問題もあって、保守もリベラルも「大きな政府」を志向せざるをえない。しかし、文化的・社会的論点での分断は極めて深刻→南北戦争レベルで深刻な 2 つの世界観、生活様式の「対立」。リンカン以来の普遍的な「自由・平等」の理念すら、左右の両サイドから見直しの提起がなされている。
  - 保守。アメリカ統合の理念は普遍的な「自由・平等」であるべきか？固有の歴史や文化、共同体の擁護では？
  - リベラル。「自由・平等」の理念には欺瞞があったのではないか？
- アメリカの課題。レーガン革命以降の社会の流動化＝経済の自由化・社会の個人主義化→経済格差と社会の分断。社会の共同性・社会的合意をいかに回復するのか。

［図表-6］ アメリカの政治経済秩序の変化

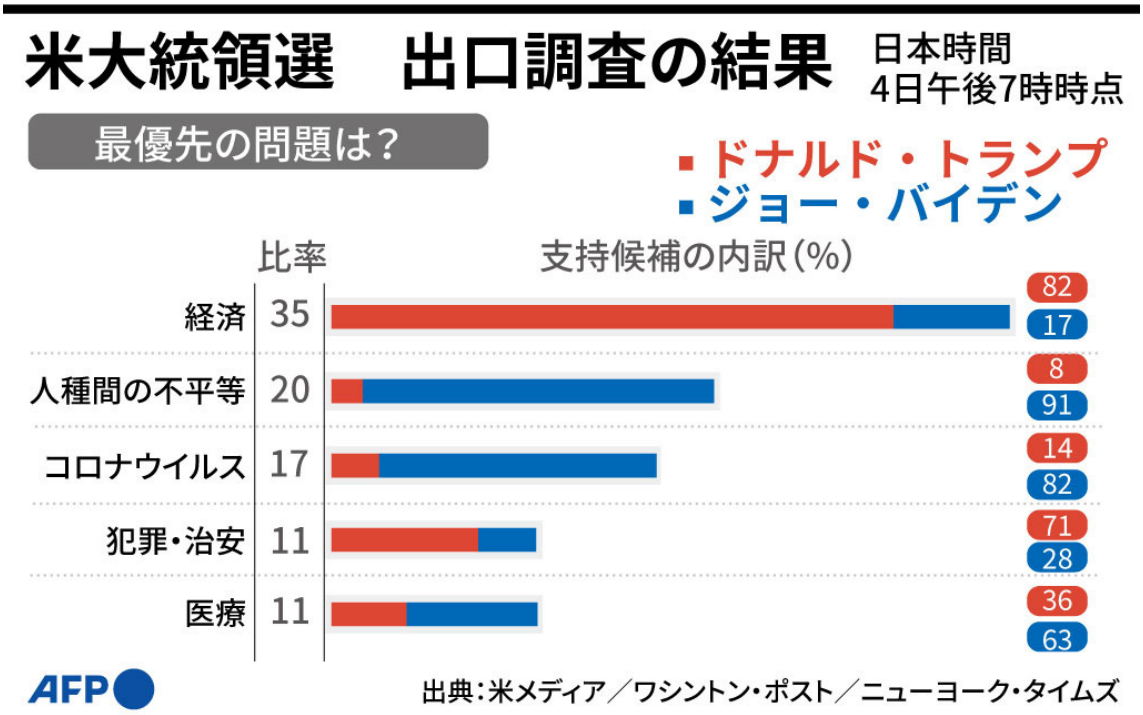
  - 保守。アメリカ固有の歴史や文化、地域コミュニティの擁護？
  - リベラル。多様性とチャンス？
  - リベラリズムの見直し→リベラルとはもともと「教養あるエリートたち」による共同体への献身を意味した。しかし、とりわけ 1960 年代以降のアメリカではこのような意味合いは失われ、「個人の権利や利益を自由に追求すること」に読み替えられた。
  - では、個人主義的傾向を弱め、共同性への回帰をめざすのか？

［図表-1］　2020 年アメリカ大統領選挙の概要

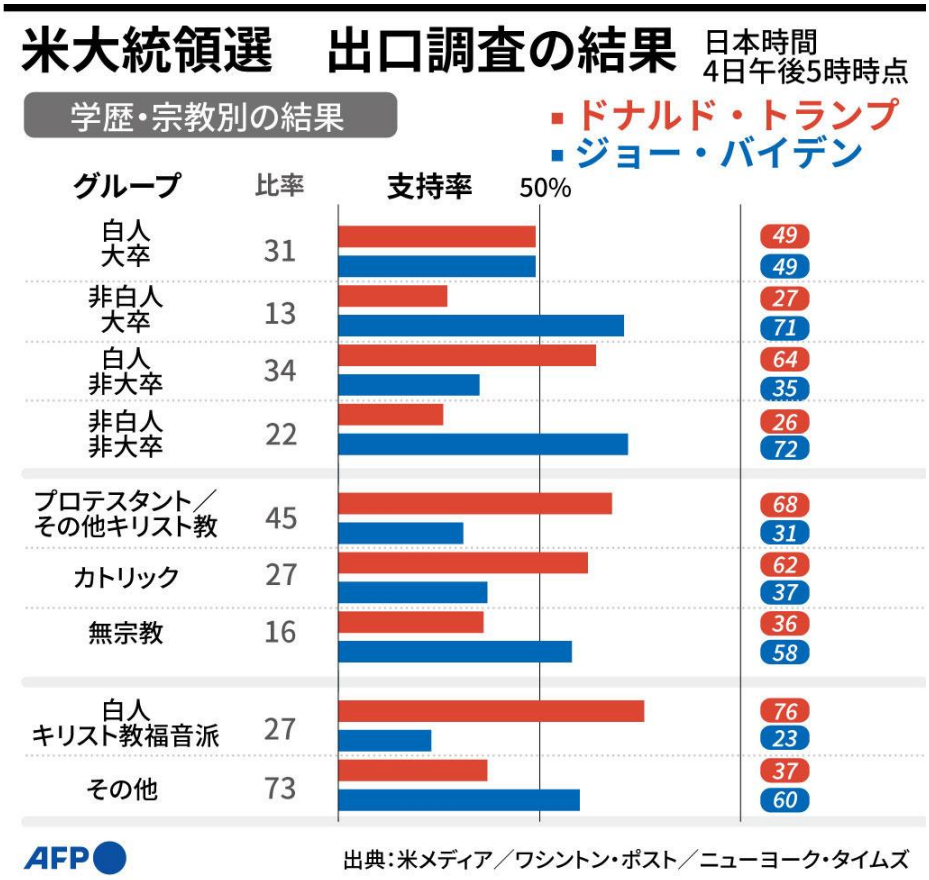


（出所）AFP

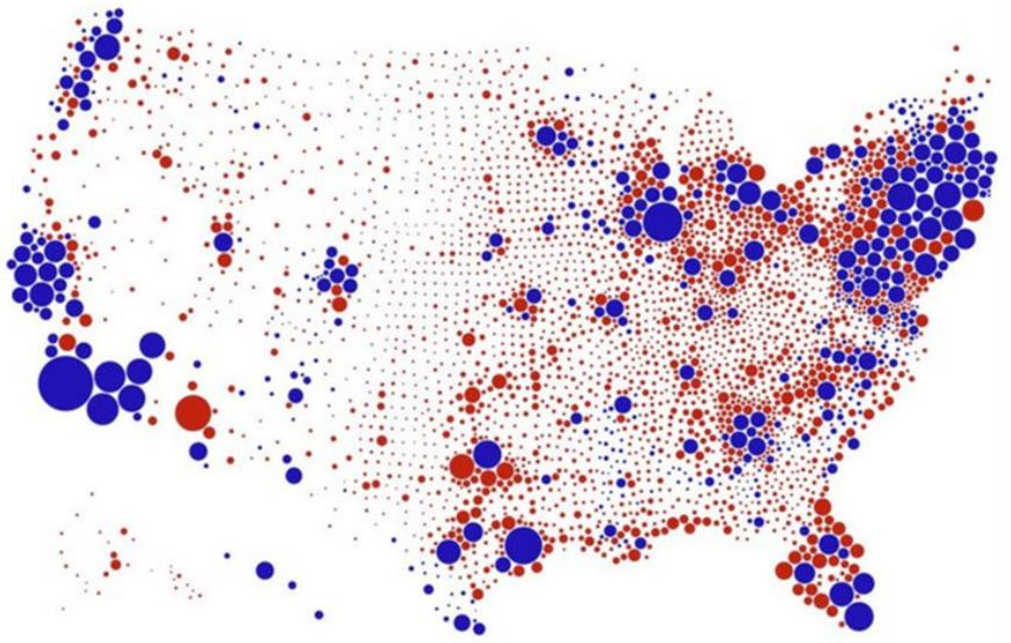
［図表-2］保守とリベラルの対立～コロナ対策か、経済か



［図表-3］保守とリベラル～どのような人たちか

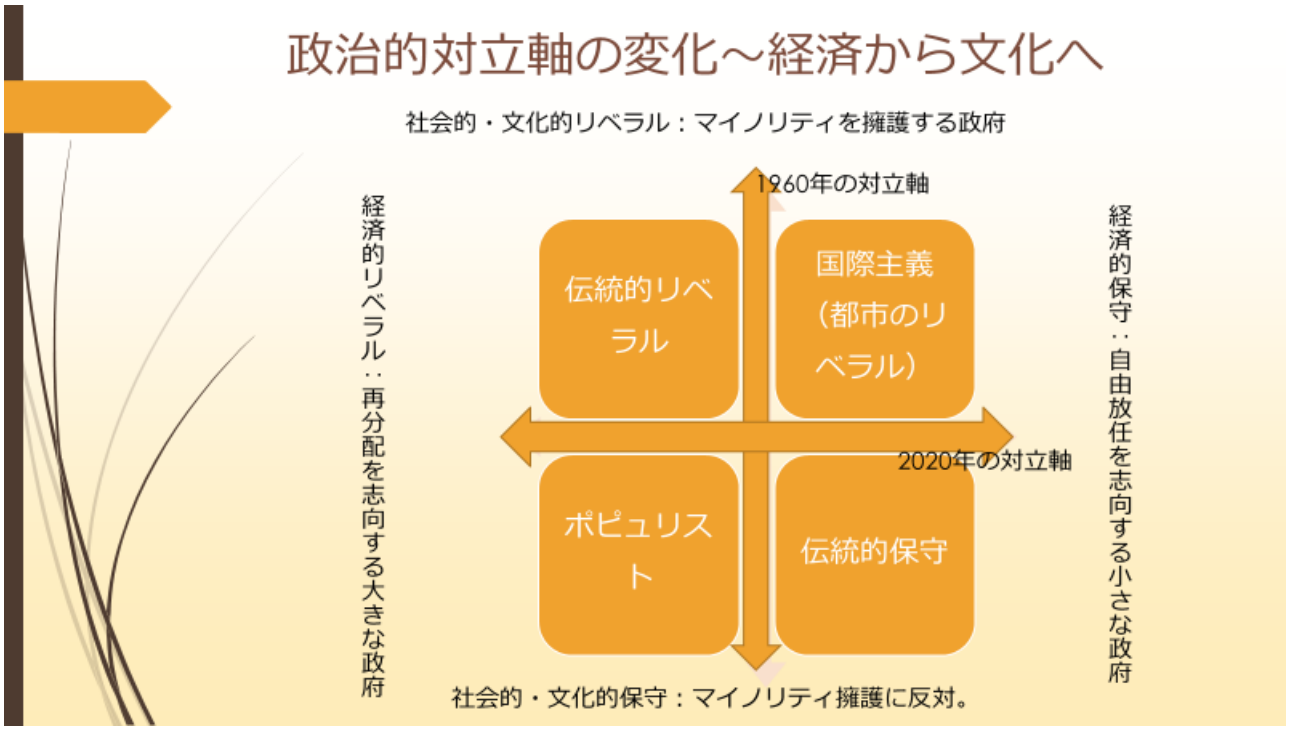


［図表-4］保守とリベラル～どこに住んでいるのか



（出所）Noe

［図表-5］政治的対立軸の変化



（出所）Victor をもとに報告者作成

［図表-6］アメリカの政治経済秩序の変化

	ルーズベルトの時代	レーガンの時代	現在
政府	大きな政府（リベラル優位）	小さな政府（保守優位）	大きな政府（混乱・拮抗）
市場経済	規制された市場（製造業）	競争的市場（金融）	競争的市場（GAFA）→規制？格差の是正？
社会	仕切られた社会	個別化・流動化した社会	分断化した社会→共同性の回復？

（出所）報告者作成

【参考文献】

会田弘継『破綻するアメリカ』岩波書店、2017 年

会田弘継「「アメリカ保守思想の変容と「小さな政府」の終焉」」『中央公論』2020 年 9 月号

会田弘継「トランプ政権を取り囲む思想潮流を考える～反レーガン主義とポスト・リベラルの興隆」久保文明編『トランプ政権の対外政策と日米関係』日本国際問題研究所、2020 年

会田弘継「あのニューヨーク・タイムズが突き進む歴史歪曲、記事改竄、批判封殺～BLM を後押しも混乱を助長」『現代』2020 年 10 月 23 日 <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/76613>

会田弘継「バイデンの民主党は歴史的敗北を喫した～米政治主流派の破産と凋落」『現代』2020 年 11 月 13 日 <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/77307>

井上達夫『自由の秩序～リベラリズムの法哲学講義』岩波現代文庫、2017 年

井上弘貴『アメリカ保守主義の思想史』青土社、2020 年

ジョン・C・ウィリアムズ（山田美明、井上大剛訳）『アメリカを動かす「ホワイト・ワーキング・クラス」という人々』集英社、2017 年

宇野重規『保守主義とは何か』中公新書、2016 年

岡山裕『アメリカの政党政治～建国から 250 年の軌跡』中公新書、2020 年

小谷哲男「米大統領選でどちらも敗北を受け入れない時に起こること～問われる「権力の平和的な移行」という原則」WEDGE Infinity <https://wedge.ismedia.jp/preview/7cf9527ba371deb19a6682922856a54edd2cb92c>

ラッセル・カーク（会田弘継訳）『保守主義の精神』中公選書、2018 年

金成隆一『ルポ トランプ王国 2～ラストベルト再訪』岩波新書、2019 年

河音琢郎・藤木剛康編『オバマ政権の経済政策～リベラリズムとアメリカ再生のゆくえ』ミネルヴァ書房、2016 年

貴堂嘉之『南北戦争の時代 19 世紀～シリーズ アメリカ合衆国史②』岩波新書、2019 年

アーサー・M. シュレージンガー（都留重人訳）『アメリカの分裂～多元文化社会についての所見』岩波書店、1992 年

シーダ・スコッチポル（河田潤一訳）『失われた民主主義～メンバーシップからマネージメントへ』慶應義塾大学出版会、2007 年

玉利伸吾「米国の分断なぜ？～南北戦争の遺恨なお ゆらぐ「国のかたち」」『日本経済新聞』2020 年 11 月 16 日

パトリック・J・デニーン（角敦子訳）『リベラリズムはなぜ失敗したのか』原書房、2019 年

ピーター・ドラッカー『ポスト資本主義社会～21 世紀の組織と人間はどう変わるか』ダイヤモンド社、1993 年

中野耕太郎『20 世紀アメリカの夢 世紀転換期から 1970 年代～シリーズ アメリカ合衆国史③』岩波新書、2019 年

ルイス・ハーツ『アメリカ自由主義の伝統』講談社学術文庫、1994 年

サミュエル・ハンチントン（鈴木主税訳）『分断されるアメリカ』集英社文庫、2017 年

藤木剛康「決められない政治～政策形成プロセスの変容と経済政策」谷口明丈、須藤功編『現代アメリカ経済史～「問題大国」の出現』有斐閣、2017 年

古矢旬『グローバル時代のアメリカ 冷戦時代から 21 世紀～シリーズ アメリカ合衆国史④』岩波新書、2020 年

A.R.ホックシールド（布施由紀子訳）『壁の向こうの住人たち～アメリカの右派を覆う怒りと嘆き』岩波書店、2018 年

チャールズ・マレー（橘明美訳）『階級「断絶」社会アメリカ～新上流と新下流の出現』草思社、2013 年

南川文里『アメリカ多文化社会論～「多からなる一」の系譜と現在』法律文化社、2016 年

山岸敬和「新型コロナウイルス感染症とトランプ的アメリカ」『国際問題』695 号、2020 年

マーク・リラ『リベラル再生宣言』早川書房、2018 年

水島治郎『ポピュリズムとは何か』中公新書、2016 年

冷泉彰彦「結局は「コロナか？経済か？」が争点だった米大統領選」『Newsweek』2020 年 11 月 5 日

ヘレナ・ローゼンブラット（三牧聖子、川上洋平、古田拓也、長野晃訳）『リベラリズム 失われた歴史と現在』青土社、2020 年
渡辺将人『見えないアメリカ』講談社現代新書、2008 年
渡辺靖『白人ナショナリズム～アメリカを揺るがす「文化的反動」』中公新書、2020 年
Yoni Appelbaum, “Is the American Idea Doomed?,” *The Atlantic*, November 2017
Joe Biden's DNC speech, August 21, 2020
（「民主党 バイデン前副大統領の受諾演説」NHK・アメリカ大統領選挙 2020
< https://www3.nhk.or.jp/news/special/presidential-election_2020/report/about_joe-biden/about_joe-biden_02.html>）
David Brooks, “Where Do Republicans Go From Here?”, *The New York Times*, August 7, 2020
David Brooks, “How Democrats Won the War of Ideas,” *The New York Times,* October 22, 2020
Tucker Carlson, “We Are Ruled By Mercenaries Who Feel No Long-Term Obligation To The People They Rule,” Real Clear Politics, January 3, 2019
William A. Galston, “The Enduring Vulnerability of Liberal Democracy,” *Journal of Democracy*, 31:3, July 2020
David Greenberg, ”An Intellectual History of Trumpism,” *Politico*, December 12, 2016
Kamala Harris’ Victory Speech, November 7, 2020（（演説全文）ハリス氏演説「あなた方は民主主義を守った」「勇気づけられた」とSNSで反響<https://www.youtube.com/watch?v=jFCTOpwUeto>）
Rain Noe, “A Great Example of Better Data Visualization: This Voting Map GIF: "Land doesn't vote. People do"”, Core 77, October 19, 2019
<https://www.core77.com/posts/90771/A-Great-Example-of-Better-Data-Visualization-This-Voting-Map-GIF>
Gladden Pappin, “From Conservatism to Postliberalism: The Right after 2020”, *American Affairs*, IV:3, Fall 2020
Plautous, “Notes on the Origins and Future of Trumpism”, *Journal of American Greatness*, February, 2016.
Andrew Sullivan, “The Trap the Democrats Walked Right Into,” *Weekly Dish*, August 29, 2020
Remarks by President Trump at South Dakota’s 2020 Mount Rushmore Fireworks Celebration, July 4, 2020
（「【米国：動画字幕】2020 年サウスダコタ州マウント・ラッシュモア花火大会におけるトランプ大統領の演説」海外情報ニュース翻訳局
<https://www.newshonyaku.com/21162/>）
Donald Trump's RNC speech, August 28, 2020
（「【詳報】トランプ大統領指名受諾演説」NHK ニュース
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200828/k10012589651000.html?utm_int=news-new_contents_latest_004 >）
Jennifer Victor, “The clockwork rise of Donald Trump and reorganization of American parties,” *Vox*, March 14, 2016 <https://www.vox.com/mischiefs-of-faction/2016/3/14/11223982/clockwork-rise-of-donald-trump>